九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社會階級の本質(二)：学説史の立場からの研究

竹原，良文
九州大学法学部 ： 助教授

https://doi.org/10.15017/1260

出版情報：法政研究. 18 (4), pp.91-139, 1951-03-10. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

社會階級の本質（二）

―学説史の立場からの研究―

竹原良文

目次

一　はしがき
二　社會階級論の學説史的系譜
三　特權論
四　暴力論
五　分業論（一）
六　分業論（二）
七　政治社會と社會階級（むすび）
（以上前號）

四

特權論はブルジョア民主主義革命論として自己自身を止揚し、法律上の不平等關係の撤廢をもつて階級差別を解消し去つたことを宣言したけれども、それはいまだ決して社會階級の存在そのものを解消し去つたのではなく、ただ新らしい階級的不平等を生み出したのにほかならなかつた。

かくして既にルソウの系譜に立つ觀念論的平等論、空想的共産主義の立場からは、私有財産制度、財産の不平等に對する鋭い攻撃の聲が、フランス革命の當初から擧げられてきた。(一) このように優勢な空想的社會主義の理論が、機械

的唯物論と結合して、フランスにおいてはプルードン主義が、ドイツにおいてはフォイエルバッハ唯物論以後の俗流唯物論からデューリングの暴力論が現れてきた。そして社會的ダーヴィニズムはかような理論傾向を促して、グムプロウイッ、オッペンハイマアの民族闘争と征服理論を社會階級論につけ加えてきた。

第三項において述べたように、社會階級の本質を特權に求める理論は、必らずしも社會階級を政治權力や法的手段や獨占の創造的作爲であるとみなすものではなくして、かような特權をうみ出している社會的存在事實に對する認識をもつていたといわねばならない。たゞかような不平等關係の社會的基礎に關してはいまだ明確でなかつた。そこに暴力論、すなわち實力論乃至征服論が階級理論の中に入りこむ餘地が存在していた。しかも征服理論は歴史學説のうちに廣く普及していた歴史觀にほかならなかつた。

フランスにおいてはすでに Boulainvilliers が、その著「フランス古代國家史」(Histoire de l'ancien gouvernement de la France, 1727) のなかで、貴族と下層階級との差別の起源をフランク族のゴール族征服という歴史的事實にもとめて以來、(二) かような史觀は一般に承認せられてきたことが認められるのであつて、特權論的階級論はその一方の源泉をこゝにもつていたと言わねばならない。シエイエスはかようなブゥランヴイリエルの理論の影響のもとに、(三) 貴族と第三等族をそれぞれフランク人とゴール人の子孫であると考え、征服こそ貴族階級の特權の基礎であることを認めている。そして彼は舊い征服者の子孫に對する新しい征服を、舊支配者のその故郷たるゲルマンの森への追放を主張している。(四)

既に述べたようにサン・シモンは、等族にかわる近代階級の出現を豫感していたのであるが、(五) 彼もまた少くとも社會階級の成立に關してはかような通俗的征服説に追隨している。

『フランク族がゴオル族を征服し、その國土を彼らのあいだに分割するや否や、彼らはこの國の産業上及び軍事

上の首長となつた。それについで産業階級は軍事階級より分裂し、重要な地位を得、軍事上の首長とは異つた首長を自ら得た。そして今日よおやく彼らは社會の第一の階級となるに充分な實力と手段をもつことになつた。したがつてあなたがたが、産業者が一四〇〇年以來フランス民族の下層階級をなしているという事實から、彼らはつねに最下層たるべく運命づけられてきたのであつて、今日最高級の權力と尊敬の地位にのぼることはできない——と結論することは誤りである。』

サン・シモンはこのように近代階級の不平等の原因を征服の歴史的事實にもとめ、かような征服によつて成立した封建制度の崩壞の必然と、産業組織の確立によつて、産業階級の勝利を主張していた。(六)

社會階級の鬪爭理論を歴史的實證的に基礎づけようと試みたフランス王政復古時代の史學者 François Guizot, Augustin Thierry, François A. M. Mignet が史的唯物論の發展に寄與したことは、エンゲルスも指摘しており、マルクス自身もまた暗に彼らの功績を承認しているのであるが、(七)これらの史學者の階級論は、サン・シモンのいまだ分明ではない階級分析を基礎としており、また彼の征服論のわるい影響からぬけ出すことができなかつた。當時フランスにおいては重農學派の理論が社會階級の經濟的分析を試みつゝあつたことを思うならば、このことはいかにも奇妙に見える。

ギゾオは三大社會グループの存在を指摘するが、それによれば第一グループは土地所有からの收入で生活している人々、貴族階級であり、第二のそれは動産または土地財産を自己の勞働によつて增加させようとする人々、ブルジョアジイであり、第三のグループは財産などもつていないで專ら自分の勞働で生活している人民である。(八)

こゝに財産私有に對する關係が社會階級の概念のなかにとり入れられたことは、近代社會理論の發展の影響にほかならないけれども、かような財産の本質がむしろ暴力や征服から說明せられるところにその特徵がある。特に階級起

源論においてはギゾオは明かに征服説をとつている。すなわち勝者と敗者、むかしの征服者の後裔と敗者の子孫、この關係から社會階級が成立し、フランスの歴史はこの兩者の闘争の歴史であり、革命はその終結であると述べている。(九)

テイエリもまたフランス史の根本問題として階級闘争を擧げ、この闘争を征服者と被征服者との闘争として説明している。

彼によればフランス史はガリアにおけるローマ人の支配の沒落から始まり、こゝにゲルマンの征服者たるシカンブル人と土着のガリア・ローマ人の二大敵對勢力の衝突が始まつた。征服者の子孫が貴族階級として政治權力を握り、敗北者の子孫から貢納と勞働の義務をおう從屬者の階級が成立した。かような現象はフランスにかぎらず歐洲の主要な國家の歴史について認められるところであつて、地位や身分の分化は、かように民族の民族に對する征服に起因していると説明している。(一〇)

ヒュームが合理主義的國家契約論を批判しつゝ實證的社會理論を展開しようと努力していたことは既に述べたが、彼がそのとき政治社會の起源を征服や簒奪に求めたことは指摘したとおりである。しかし彼の理論には勞働生産性の不足と分業の必然性に關する見解の萌芽も存在していたのであつて、かような二元論的階級論はアダム・ファグソンの『市民社會史論』のうちにもうかがわれる。

ファグソンは一方において、族父のその子孫に對する配慮が增大し、その勞働と技術が他の共同体員とは別個に行使されるのにともなつて、排他的占有が始まり、土地とその果實に對する私有が追求せられ、かような私有財産の成立とその保障が確立するにともなつて、分業もまた發展してきたことを説明しながら、また他方においては戰争における指導と戰功による不平等な生活狀態、すなわち獲物の多少や榮譽こそが階級秩序發生の端緒であると述べてい

る。(一一)

ファグソンは階級起源をただちに民族の民族に對する征服にもとめるものではないが、私有財産の成立にともなつて發生する掠奪的戰爭こそが階級分化の本質的契機をなしていることを認めている。人間社會において、人々は富を渴望し、名譽を驚歎するが、このような貪欲と名譽心とが掠奪と征服におもむかせる。(一二) また他の箇所では、軍人階級と平和的人民との分裂こそ、階級分化のもつとも重要な端緒であると述べる。

『職業と政治の發展にともない、各國家の人民は諸階級に分裂する。この分裂にあたつて軍人と平和的人民のあいだの差別ほど峻嚴なものはない。人間を貴族と奴隷の關係におくためにはこれよりのぞましいものはない。舊來の奴隷制のきびしさが緩和される場合といえども……この差別はいまだなお貴族と一般人民とを區別し、その國を支配し統治するようさだめられた特別の階級を特徴づけるうえに役立つている。(一三)』

階級の本質に關するかような唯物論的二元論は、アダム・スミス、リカアドオの正統派經濟論のうちでよおやく清算せられた。

しかしかような暴力論は、サン・シモン主義から出發するプルードン、コント、ロオドベルツスに至る空想的社會主義の系譜のなかから、またフオイエルバッハの人間學的唯物論以後の自然科學的俗流唯物論の潮流からうまれた機械的唯物論から、しばしば主張せられてきた。(一四) エンゲルスによつて批判の對象となつたデューリングの暴力論は、かような空想社會主義の亞流的理論の体系の綜合と形而上學的基礎づけにほかならない。

現代におけるかような暴力論の他の理論的源泉は、產業資本の膨脹によつてもたらされた民族的主戰論であり、ダアウインの生存競爭の理論を社會的領域に適用した、バジョットに始まり、グムプロウイツ及びオッペンハイマアに發展した實證的一元論の民族鬪爭論である。

機械的唯物論は、力學上の場所的機械的運動をのみ認めて、物質自体の内在的矛盾から生ずる運動の量から質への飛躍を認めない。したがつてこの理論は、絶對的自己同一性の世界から分裂と抗爭の運動が發展してくることを説明するためには、運動の端緒を外部からの最初の衝撃にもとめざるをえない。したがつて社會的現象を説明するにあたつては、社會發展の要因を社會的存在の内在的矛盾から説明するのでなしに、外部からの衝撃、すなわち征服に求めざるを得ないのであつて、デューリングの暴力論は、征服とそれによつてうみだされた階級の階級に對する暴力的支配から社會の運動を説明している。(一五)

デューリングによれば政治的諸關係の形成こそ歴史的に基礎的なものであり、経濟的從屬は單に作用、あるいは第二次的事實にほかならない。根本的要因は直接的な政治的暴力のなかに求めらるべきである。私有財産は强奪あるいは暴力的占有によつて成立したのであつて、かような暴力的私有のうえに奴隷勞働の占有が可能となつた。現代におけるあらゆる種類の富も、經濟上における人間の人間に對する間接的依存も、いづれも以前の直接的な征服及び掠奪のやゝ變形した一遺産としてのみ理解せられる。(一六)

社會的ダアヴィニズムの理論は、まづ英國においてウォルタア・バジョットの『自然科學と政治學』(W. Bagehot, Physics and Politics)に示されているが、バジョットはかような自然科學的唯物論の立場から、數個のカストに分裂した民族の成立を數次の征服の結果にもとめ、各カストの限界が征服者と被征服者の分裂の限界と一致すると説明している。(一七)

かような理論を完成したものが、オーストリアの政治社會學者グムプロウイツの實證的一元論であつた。彼は、現代國家においては種族の觀念が消滅して、かような種族は同一の階級意識をもつた等族乃至階級に轉換するにいたつたことを認める。貴族・農民及びブルジョアジイのいづれも、種族的差別ではなしに、階級的分裂とみなされる。し

かしこれらの階級は舊時代の分裂の根跡を示すものであつて、職業・勤務・所得及び態度の、世襲的な相互分裂的、孤獨的區分こそ、種族的差別を立證する要件である。(一八)

異種族から構成される人民の結合の方法と樣式は決して恣意的でなしに、總体として、また集團として、相互に一定の關係、すなわち一方の他方に對する支配關係に立つている。この支配關係はまだ同時にその構成員のあいだにおける國民經濟上の分業にほかならない。グムプロウイツにおいては、分業は權力的に創造せられた搾取の手段そのものであつて、支配組織は經濟上の分業をつくりだすことを目的とするものにほかならない。(一九)

貴族と農奴との職能的分化は種族的分裂と一致するけれども、ブルジョア等族の成立もかような種族的差別と無關係ではない。異種族に屬する商人は、交換經濟の發展につれて、彼らの居留地、植民地を貴族の庇護のもとに形成したが、かような居留地が都市に發展し、そこに商業等族をうみだした。カスト成立の事實と現代における職能的階級のカスト的固定化の傾向は、かような階級＝種族理論を論證するものであると述べている。(二〇)

サン・シモンやフランスの史學者たちが、同じく種族征服論の立場において、かような征服支配關係の轉換の可能性を認めるのに反して、グムプロウイツにおいては階級のかような種族的構成は必然的法則であり、宿命的分裂である。法律上の平等關係の實現と法的特權の解消によつても、かような社會階級の種族的固定性は解消せられない。かような意味において現代的平等國家は、實質的には階級國家にほかならない。(二一)

フランツ・オッペンハイマアがグムプロウイツの理論に追隨した。彼は富の收奪に對する政治的手段と經濟的手段の區別をみとめ、遊牧種族の農耕種族に對する征服に端緒を發する實力的支配にもとづく政治的手段による搾取が、歷史的に經濟的搾取手段にその地位をゆづつてゆくことを主張している。政治的手段とは盜掠であり、他人勞働の暴力的不當占有であり、經濟的手段は自己の勞働による財の取得及び自己の勞働の他人勞働との等價交換である。(二二)

原始社會においては、狩獵種族においても、農耕種族においても、前者では階級發生の原因たる本質な財産上の差別がなかつたのであるから、また後者にあつては分散的な土地定住の故に、そこでは盜掠や征服への必然的契機がかけていた。遊牧種族においてはすでに階級成立の端緒たる財産上の差別が存在したが、かような社會的分化は、政治的手段の介入がないかぎり、きわめて微々たるものにすぎない。原始社會におけるかような平等關係を終極的に破壞するところのものは政治的手段である。戰爭による捕虜の獲得と奴隷制こそ階級的差別を成立せしめたものであつた。奴隷所有は好戰的遊牧種族が發見したものであり、人による人の搾取はかようにして發展してきた。政治的手段としての國家は、かような階級的分裂と搾取のわくとして必然的になつたものにほかならない。(二三)

マルクス主義の史的唯物論がかような暴力論となんらのかかわりをもたないことは後に述べるところであるが、階級の本質に對する科學的認識の不徹底のために、かような暴力論が史的唯物論のよそおいのもとにしばしば主張せられてきた。カアル・カウツキイの著「史的唯物論」はかような例であつて、彼はそのなかで生産手段に對する占有こそ階級分裂の基礎たることを認めながら、生産關係の内在的矛盾の發展、すなわち精神的勞働と肉体的勞働の分裂とその世襲化、私有財産制の發生と富の不平等、奴隷制の成立から階級の本質を説明するエンゲルスの見解を批判して、特に奴隷制の成立を一つの氏族共同体の氏族共同体に對する戰爭の結果にもとめている。(二四)

さらにカウツキイは「征服國家」を説明しつゝ、社會階級及び國家の成立を原始共同体の内部に發生する要因から説明せんとする企圖が、なんらの滿足すべき結論をもたらしはしないと述べている。かような理論をもつてしては素朴な暴力論を充分に拒否しえないのみならず、また階級の發生の契機を共同体内部の經濟的發展から説明しようとする、より發展した試みをも妨げていると述べている。すなわち戰爭こそが奴隷ー自己の共同体のためにではなしに他の共同体の族長のために勞働する最初の勞働者ーを提供するものであり、かくてまた戰爭こそ個人あるいは團体を

して富の蓄積を可能ならしめる獲物を提供している。グムプロウイツの『民族闘争論』よりもすでに七年前に到達されていたとカウツキイ自らいうところのかような暴力論こそ、彼の立場をして史的唯物論より離れて、機械的唯物論に轉換せしめたものであつた。(二五)

かように實證的唯物的であるかにみえる暴力論がいかに非科學的見解であるかについては、すでにはやくより合理主義的觀念論の立場からの批判がつねに存在してきたし、英國功利主義のうちにおいても次第に克服せられた。そして現代においてはかような暴力論は史的唯物論の發展によつて徹底的に批判せられるにいたつた。

すでにロックはかような征服說を批判して、征服が政府の成立を意味しないこと、家屋をとりこわすことが新しい家屋の建築を意味しないことをひとしいと述べている。そこにはつねに人民の合意が存在せねばならない。(二六)

フランス唯物論の立場においてドルバックは、公正や正義の原則から征服論に反對している。暴力は勿論のこと、自由な人民の合意といえども、公正・正義の原則から離れた政府を合法化しはしない。階級的不平等關係は、ドルバックにとつては、人間社會における自然法則の表現たる公正の原理から說明されるのであつて、社會成員間の完全な平等は眞の不正である。もつとも效用ある人は、それにふさわしい榮譽と報酬とを期待しうるのであつて、政治上の階級制度は、かような自然的公正の基礎にもとづいていると述べている。(二七)

英國經濟學派においても最初ヒュームやアダムスンに認められた暴力論的傾向が、公正あるいは功利(utility)の觀念によつて漸次清算せられていつたことは既に述べたとおりである。

ルソウは『人間不平等起源論』のなかでかような暴力論を批判しつゝ、征服の權利はそれ自体權利ではないのであるから、他の權利が制定せらるべき根據として役だたないし、完全な自由を回復した人民が、自ら進んで勝利者を彼らの君主に選ばないかぎり、征服者と被征服者との相互關係はつねに戰爭狀態にとどまつていたと述べている。(二八)また

他の箇所でルソウは暴力論の批判にとつてきわめてしんらつな見解を示しているが、この見解についてエンゲルスは『反デューリング論』のなかで、きわめて唯物論的見解であると批評している。すなわちルソウは、たとえ不平等な自然的資質をそなえた自由な原始人が森林のなかであつたとしても、そして一方が強力をもつて他方を従属させたとしても、他方がつねに逃亡する可能性と機會をもつかぎり、被壓迫者はいつでも逃げだすことができるという。『服従の紐帶は、一方の他方に對する相互の依存と、彼らを結合する相互の欲望によつてのみ、形成されているのであるから、ある人がまづ、他人の援助なしにはやつてゆけないような狀態にあることを餘儀なくされているのではないかぎり、彼を奴隷とすることはできないことを、各人は認めなければならない。』(二九)

エンゲルスが機械的唯物論者のデューリングに對しておこなつた批判は、グムプロウイツ及びオッペンハイマアの暴力論に對する辯證法的唯物論の側からの批判でもあろう。

すでにマルクスはその初期の著作『ドイツ・イデオロギー』のなかで、征服説がマルクスの歴史觀と全く相矛盾することを指摘している。掠奪はすでに掠奪される民族の生産諸力を前提とせねばならないし、掠奪の對象によつて規定されるし、また掠奪は急速にゆきづまるのであるから、そこにはつねに生産の開始が要望せられるのであつて、こゝに從來の生産發展段階が決定的要素となつてくると述べている。(三〇)

エンゲルスは『反デューリング論』のなかで、歴史の發展を暴力行爲、すなわち政治の創造活動から説明する史觀が、全く陳腐な歴史觀であり、すでにフランス王政復古時代の史家によつて批判せられたことを明かにしている。(三一)

奴隷制についてみるに、その基礎は決して暴力的隷屬ではなしに、奴隷制を可能とする生産のある程度の發展と、分配におけるある程度の不平等の成立が前提とせられねばならない。私有財産に關して考察するに、それは強奪や暴力の結果として歴史に登場するのではなしに、すべての文化民族の自然發生的共同体の内在的分裂と矛盾の發展の結

果、すなわち商品交換經濟の成長の效果にほかならない。資本主義的生產關係と賃勞働はいうまでもなく、投機生產と商業恐慌の發展も、暴力をはなれて、全く純經濟的關係からのみ說明せられる。(三二)

軍事的實力、戰爭といえども、物質的手段を基礎とするものである以上、その武器の生產は生產一般の諸關係を前提とするものであつて、かような經濟的前提條件こそ究極的に軍事的實力を決定するものにほかならない。(三三)

かようにエンゲルスは、暴力にさきだつて、かような暴力を必然的たらしめる生產關係における分裂、すなわち他人の消費のための商品生產と交換經濟の發展を、階級分化の本質的契機と認めるのである。

私どもはこゝに暴力論の体系を去つて、生產關係の內在的矛盾の發展の效果としての分業を社會階級の基礎と認める分業論の系列を檢討することとしよう。

(一) Laski, Socialist Tradition in the French Revolution (Law & Politics pp. 66 f.)

(二) Paul Janet, Histoire de la science politique, vol. II, p. 321.

(三) Id., p. 721.

(四) E. Sieyés, Qu'est-ce que le tiers état?, p. 32.

(五) Saint-Simon, Lettres d'un habitant de Genéve, なお Catéchisme politique des industriels, p. 61. においてサン・シモンは、產業者と自由主義黨を區別し、後者が利潤のうえに新しい封建制度を再編成する必然性を指摘している。

(六) Saint-Simon, Catéchisme politique des industriels, p. 15, 59; Paul Barth, Philosophie der Geschichte als Soziologie, SS. 165—166.

(七) エンゲルス、シュタルケンブルグあての手紙(一八九四年一月二五日)、(マルクス・エンゲルス全集、第二一卷、三四九頁以下。)マルクス、ワイデマイヤーあての手紙(前揭)參照。

（八）フランス哲學史（ナウカ社版）四四四頁。

（九）仝　右、四四五頁。

（一〇）仝　右、四四五—四四六頁。

（一一）Adam Ferguson, Abhandlung über die Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft, SS. 135—140.

（一二）A. a. O. S., 174.

（一三）A. a. O. S., 211.

（一四）Oppenheimer, System der Soziologie, Bd., Ⅱ., S. 174.

（一五）Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, S. 42.

（一六）A. a. O. SS., 162f., S. 182.

（一七）W. Bagehot, Physics & Politics, p., 149.

（一八）Gumplowicz, Allgemeines Staatsrecht. SS., 164—165.

（一九）Derselbe, Rassenkampf, SS., 207—208., S, 213.

（二〇）A. a. O. S., 214, 216.

（二一）Derselbe, Allg. Staatsrecht, SS., 260ff.

（二二）Oppenheimer, Der Staat, Ⅲ. Aufl., 1929; S., 10.

（二三）A. a. O. SS., 11—16; Derselbe. System der Soziologie, Bd., Ⅱ, SS., 259—260.

（二四）Kautsky, Die materialistische Geschichtsauffassung, Ⅱ. Aufl., (1929). Ⅱ. Bd., SS., 15f.; S., 74.

（二五）A. a. O. SS., 81—82.

（二六）Locke, Two Treatises on Government, pp., 284f.

(二七) D'Holbach, Sociales System (übersetzt. v. Umminger), T. II., S, 16; T. I., SS. 134f.
(二八) Rousseau, The Social Contract & Discourses, p. 222
(二九) Ibid., p. 205. Engels, Anti-Dühring, SS., 94—95.
(三〇) マルクス『ドイツ・イデオロギー』、(マルクス・エンゲルス選集、(一八頁、七六—七七頁)。
(三一) Engels, a. a. O. S. 164.
(三二) A. a. O. SS., 165—169.
(三三) A. a. O. S. 172.

五

既に述べたように、英國の功利主義やフランスのフィジオクラットの實證的社會理論のうちに社會階級論が發展してきたのであるが、それは觀念論的契約理論の自然權理論を批判して、具体的な人間の生活的現實のうえに、すなわち人間の勞働と交換の經濟的諸關係のうえに自然權の理論を基礎づけようと試みており、したがつてそこではかような現實の不平等關係に對する法則科學的認識がいよいよ必要とせられた。そしてかような人間の生産と交換の必然性こそ、分業社會をうみだしたものにほかならない。生産の統一的組織のなかにおける分業關係の內在的分裂と矛盾の發展のうちに社會階級の本質的契機をもとめる古典派經濟學の諸理論と、その理論上の正統の繼承者たるマルクス・レーニズムの史的唯物論の体系を、社會階級論における分業論の系列として綜合的に把握し、その理論体系の展開過程と理論上の諸問題を究明することは、社會階級の本質の理解に寄與するであろう。

ジョン・ロックが『政治論二論』のなかで、國家契約論を批判しつゝ、實證的社會理論のうえにその政治理論を基

礎づけたことはすでに述べたが、彼がそこで展開した財産に關する理論は、社會階級の經濟的分析の基礎を與えたものと考えられる。

ロックによれば、土地とそのうえに存在するところのものは、すべて人間存在の保存と快樂のために人間に與えられている。それらのものは、自然のおのづからなる手のはたらきによつてつくりだされたものであるから、人類に共同に所有せられ、他人を排除した個人的占有をそのうえにもつことは本來ゆるされない。しかしそれらのものが人間によつて享受せられるためには、それを特定の人間が利用しうるまえに、必然的にそれらのものを占有するなんらかの手段が存在せねばならない。(一)

かような私的占有の手段として、ロックは、人間の勞働による價値の物への賦與をあげる。土地をはじめその産物は、すべて人類の共有にほかならないけれども、各人は共有ならざる「財産」をその個人の「人格」(Person)のうちにもつている。すなわち個人自身の肉体の「勞働」と彼の手の「作業」(Work)とは彼固有のものにほかならない。かような勞働こそ自然の産物に混ぜられて、それに彼自身のものであるなにものかを附加し、かくしてこれを彼の財産とする。すなわち勞働は、自然になにものかを追加することによつて、そのものを他の人々の共通の權利から排除するわけである。(二)

自然の産物におけるとひとしく、土地自体に對する財産の圍いこみもまた個人の勞働によつてつくりだされる。主は世界をすべての人々に共通に與えたもうたが、同時に主は人が額に汗して勞働することを命じたまい、かつまた人間の貧困な狀態は彼をして勞働することを餘儀なくしている。かくて彼が開墾し、耕作し、種まくことによつて、個人自身に屬する何ものかを土地に附加して、土地を改良する場合、土地のその部分のうえに共有から除かれた個人の財産が成立する。(三)

このような立場からロックは、きわめて素朴にではあるが、土地の生産物及び土地そのものの價値を、主として勞働にもとめている。そしてかような見解は、すでにウイリアム・ペティによつて勞働價値說の萠芽が見だされていたとはいえ、當時における卓見たるをうしなわないであろう。(四) ロックによれば勞働こそあらゆる物に相異る價値を與えるものであるから、勞働の財產こそ土地の共有をくつがえすにたる。穀物や嗜好品を栽培した土地と、なんら耕作されずに共有のまゝにある土地との差異は、勞働の生產性の向上によつて前者にきわめて多くの價値が與えられていることから生じてくる。人間の生活に有用な土地の生產物の價値は、その十分の九までが勞働の效果であるといつても言いすぎではないであろう。いやその價値のうちいくばくが純粹に自然に源泉を有し、いくばくが勞働にもとづくかを評量するならば、その大部分の九九%までが全く勞働にもとづいて評價されていることがわかると述べている。(五)

土地に價値を與えるところのものもひとしく勞働であつて、勞働なしにはそれはほとんど無價値にひとしいであろう。たとえば英國で二十ブッシェルの小麥を生產する一エーカアの土地と、同一の耕作を加えるならば、同量の小麥を生產することができる同一面積のアメリカ大陸の荒蕪地の、各々の價値を比較してみるならば、そのことは明かであろう。

有用な生產物の價値の最大の部分を決定するものは勞働である。たとえばパンを例にとつてみると、耕作、收穫、脫穀等の勞働及び製パン勞働が計算さるべき勞働のすべてではない。牡牛を飼育する人、鐵や石を掘つて加工する人、種まきから製パンまでの過程で、この穀物にとつて必要な犁、水車、かまど、その他の無數の器具に用いられる材木をきりだして製材する人、これらの人々の勞働がすべて、勞働の計算に加えられねばならない。自然と土地が與えるものは、それ自体ほとんど無價値な素材にすぎない。ロックはこのように勞働價値に關する理論を展開している。(六)

かように勞働と産業によつて始められた私有財産は、人口と資本の増加によつて土地が缺乏し、きわめて價値あるものとなつたところでは、いよいよ法律、すなわち契約によつて保障せられるようになつた。そしてかような私有財産の蓄積と、その不平等の増加を促進したものは、貴金屬の發見とそれにもとづく貨幣の利用であつた。貴金屬の發見は、從來家族消費のせまい限界においてのみ要求せられた財産の蓄積を、かような消費の限界から解放し、かくて貨幣の使用とその蓄積がはじまつた。(七)

かくてロックにおいては、社會階級の成立はかような貨幣の使用と關連して説明せられる。産業の相異る度合は、不平等な割合で人々に所有を與える傾向があつたが、この貨幣の發見は、かような不平等な所有を繼續し、擴大する機會を人間に與えた。(八)

金や銀はそれ自体生活にとつてさして使用價値をもたないものであるから、これらの貴金屬はその價値を――勿論その尺度は大部分勞働によつて構成されているのだが――人間の同意によつて得ているのであるが、かような人々の同意が同時に、かような貨幣のもたらす、人々の不均衡な不平等な土地所有をも承認したことは明白であろうと述べて、階級的差別の必然性を是認している。(九)

すでに述べたようにロックの理論のうちかような實證的立場は、さらにヒュームによつて繼承され、そこに分業に關する實證的理論の發展の萠芽が見だされる。

ヒュームは『人性論』のなかの、公正と財産の起源を論じた章において、無數の人間の欲望及び需要と、かような需要をみたすべき手段の缺乏の深刻な矛盾關係を指摘する。人間は一方においてきわめて多數の欲望をもちながら、かような欲望をみたすべき能力の點においては全く無力であつて、自然は人間に對しては、他の動物に對するとは異つて、きわめて峻嚴である。孤獨の狀態にある人間は、多くの缺乏をみたすべき武器も、實力も、あるいはその他の

自然的能力をも與えられてはいない。

人間が彼の不足をおぎない、自身を他の動物と平等な地位にひきあげ、かくてこれらの動物よりもすぐれた地位をうることができるのは、社會(society)によつてのみである。社會生活によつて彼のすべての無力はつぐなわれる。かような社會狀態にあつては人間の欲望は數倍されるけれども、彼の能力はそれ以上に增大し、野蠻と孤獨の狀態においてはいまだかつてなかつたほど、彼は滿足と幸福とを與えられる。各人が別々に、かつ自分自身のためにのみ勞働するところでは、次のような三つの不便が存している。すなわち、(一) なんらかの見るべき事業を達成するには、彼の力はあまりにも微力である。(二) 彼の勞働は、自らの雜多な需要をみたさんがために、適用されるけれども、彼はその個々の技術のいづれをも完成しえない。そして(三) 彼の力と成果とはいつも均等だというわけではないので、これらの細部におけるちよつとした失敗でも、その仕事の全部を破滅させてしまう。社會こそこれらの三つの不便を克服する手段を與えてくれる。すなわち協業と勞働の分割——分業によつて人間の能力は增大する。相互の援助は失敗の危險を減少せしめる。社會が人間にとつて有利なのは、力(force)、能力(ability)及び保證(Security)が追加せられるからにほかならない。かようにヒュームは民事社會の成立を分業の必然性から說明している。(10)

ロック及びヒュームによつて發展せしめられた分業、交換及びそれにともなう不平等關係に關する理論は、アダム・ファグソンの『民事(市民)社會史論』において、明確に社會階級論として發展してきた。

ファグソンは分業についてつぎのように說明している。特別の熟練と考慮を必要とする、相異る仕事がそれぞれ分割され、相異なる人間にゆだねられるときはじめて、民族は經濟上の著しい進步をなしうることが明かである。戰爭の脅威のもとにあつて、耕作も播種もその他すべてのことを自らなさねばならない原始人は、はげしい疲勞のためにその技術能力の改善どころではない。彼はその欲望が多樣であるために創造の意欲をうしない、またその注意力が分

散されるために、特定の物の製造に必要な熟練を獲得することができない。平和と、物を他の物と交換する可能性とが、狩獵者と戰士を手工業者と商人とに轉化した。生活資材を不平等に分配する偶然の事態、自然の傾向及び有利な機會が人間の相異る業務を決定し、便宜の感情が職業をいよいよ分割する。(二)

かような分業の世襲的固定化が中世的ギルド組織をつくりだした。かような分業こそその生産の完成と豊富さとによつて富の源泉をひらき、國家はかような國民の富によつて榮譽と實力をにぎるにいたる。(三)

技術的分業の發展がいよいよ細分化され、特別の能力を必要としなくなるとともに、精神の發展を狹隘ならしめる傾向が實際にあらわれる場合には、他方では一般的觀察と思惟の擴大を與えられる人々が現れてくる。たとえば工場制手工業における親方の才能はいよいよ發達することを要求されるのに、從屬的勞働者の才能は等閑にせられる。政治家は綜合的知識をもつことができるのに反して、屬僚は自らが編みこまれている全体の機構を知らない。將軍は全般的戰略戰術に通じていなければならないのに、兵卒の知識は手足の運動にとどまつている。こゝにおいてファグソンは精神的勞働と肉体的勞働との分裂を指摘していることが知られる。(一三)

かような分業及び精神的勞働と肉体的勞働の分裂が、その結果として人間の不平等關係と支配從屬の關係を導きだした。ファグソンによればかような從屬の根據は、(一) 才能及び自然的資質の差異、(二) 財産分配の不平等、(三) 相異る技術の行使によつて獲得される相異る慣習―のうちに存している。すなわち一方では精神的な仕事があるとともに、他方では機械的 (mechanisch) な仕事が存在するが、それらは相異つた才能を要求し、そこに自ら相異つた感情がかもしだされる。このような感情が特定の仕事に對して優越と劣等を與える根據となり、精神的發展に對して有利な影響にしたがつて職業とその地位の階級が判断される。食わんがために過重な勞働に從う農民や、その技能が精神の高揚を要しない手工業者は下等視される。古代共和國における自由民と奴隷との分裂はかような原理もとづいて生

じたのであつて、家内労働や肉体労働にのみ従う婦人や奴隷は、政治や戰争の精神的労働にたづさわる自由民と區別せられた。(一四)

ついで自由民のうちにも富の分配の不平等に應じて差別が生ずるにいたつた。すなわち資産のある人々は労働から解放せられ、貧乏な人々は自ら生活の糧をえんがために額に汗して労働すべく宣告せられた。その兩者のいづれも自利の衝動にもとづいて行動しているのであつて、崇高な精神活動の原理による區別はこゝには妥當していない。こゝに法的平等の原理にかかわらず、一部の人々が榮達した反動として他の人々が抑壓され、こゝに下層階級においては無知と卑屈と頽廢が支配するようになつた。(一五)

かような階級的分裂の事實を指摘したのち、ファグソンは、民主主義が、たとえばアテナイのそれのごとく、寡頭支配におちいるか、黨派的抗争の結果として衆愚政治に墮することを指摘している。

『大國であれ、小國であれ、經濟の進化した狀態のもとにおいて人間をわかつにいたつた、相異る職能と活動にともなつて現れてくる、生活狀態の支配的不平等と精神の完成の不平等が存するところでは、民主政治を維持することはきわめて困難である。ただ私どもが民主的政治形態に反對なのは、その基礎的條件が消滅したのちにおいてのみであり、平等の勢力と平等の尊敬に對する要求を笑うべきものとみなすのは、人間性格が同一たることをやめたのちにおいてである。(一六)』

ファグソンはかように述べて、民主的平等に反對し、階級支配の必然性を辯護している。

ファグソンの分業論を發展させ、剰餘價値理論に偉大な寄與をなしたアダム・スミスの理論に入るまえに、分業理論のこの發展系列のうえにおいてスミスに先行し、スミスの理論に對して重要な影響を與えたフランスのフィジオクラットの階級理論を檢討する必要がある。

ケネェは『自然權論』(Le droit naturel) において分業をつぎのように說明している。各人は自然權たる自己の生命の維持の義務をおこたる場合に、自身の苦痛によつて罰せられるが、かような自然權は、その尊重を他の人々に對しても義務づけている。彼の自然權はその生存を第一義とすべきことを命じているとともに、また他人における同一の權利の保障の義務は、他人の自然權への介入を公正の秩序に反するとみなしている。こゝに各人の自然權の享有にあたつて調和の体系が存在せねばならない。『この体系は、家族の全成員に有利であり、家族の首長によつて、分配上の公正の秩序に從い、自然によつて規定せられた義務と、各人が社會の利益のためにその能力に應じて行う助力とに對應して、規制せられねばならない。ある人と他の人は相異つた方法でこの体系に協力する。しかしある人の勞働は他の人の勞働の負擔をかるからしめるうえに役だつている。そしてこのような分業の結果として各人は自分の仕事を一層完全に仕あげることができる。このように相補うことによつて、各人は社會の勞働の協力から生ずる利得に應じて、完全に、狹ばめられることなしに、彼の自然權を享受せねばならない。』(一七)

さらにケネェはこの著書のなかで、社會の基礎が生活の維持と富であり、かような富の保障こそ政治權力を必然的たらしめるものであることを認め、實定法の原則を一國の領域内における毎年の規則的な富の再生產と分配の秩序に求めているのであるが、(一八) かような富の再生產と分配の秩序に關連してケネェは社會階級の經濟的分析を試みている。

ミラボオによつて三大發明の一つとして誇稱されたケネェの『經濟表の分析』(Analyse du Tableau économique) は、人民を三大階級に區分している。すなわち生產的階級と土地所有者の階級及び非生產的階級 (la classe stérile) がそれである。(一九)

生產的階級とは、土地の耕作によつて國民の富を年毎に再生產する階級であつて、農耕勞働の費用を前貸し、毎年土地所有者の所得を支拂う。

土地所有者の階級に屬するのは、君主・地主及び十分の一稅取得者である。この階級は、生産的階級が毎年の前貸資本を回收し、經營資本を保持するために必要な價額を毎年くりかえされる再生産のために控除したのちに、彼らが支拂う農業上の利潤乃至純生産物（Produit net）によつてその生活を維持している。

非生産的階級は、農業に屬しないその他の勞働に從事する、すべての人民によつて構成され、その生産の費用を生産的階級と土地所有者の階級の兩者によつて支拂われるけれども、その收入をただ生産的階級からのみ得ている。非生産的とは、農業勞働が土地の生産力によつて、ある剩餘、すなわち地代を生みだすのに反して、手工業者は原材料に對し自己の消費する以上の價値をつけ加えないと考えられたからである。(二〇)

ケネエの『經濟表』は、國民の富の生産と流通及び再生産における、かような三階級間の相互關係を説明するものにほかならない。

かくてケネエにおいては、社會階級は分業によつて生じた生産上の地位の相異と、かような差別に關連した剩餘勞働、すなわちケネエのいわゆる純生産（Produits nettes）の占有によつて生ずる不平等にほかならない。

重農學派においては土地の生産力にほかならなかつた『自然の純粹な贈物』を、時として剩餘價値として敍述し、かような剩餘價値の必然性を勞働者と勞働條件の分裂から説明し、この學派中の最大の理論家としてマルクスによつて評價せられたジャック・チュルゴオ（J. Turgot）の社會階級論をかえりみることにしよう。(二一)

チュルゴオはその著『富の形成と分配に關する省察』（Réflexions sur la Formation et la distribution des Richesses, 1770）の冒頭において、分業・交換經濟の必然性をつぎのように説明している。

土地がすべての人民に平等に分配され、その面積が、各人がその生活を維持するに必要且つそれ以上のものでないならば、すべての人間が他人のために勞働しようという意欲をもたないことは明かであり、各人はまた他人の勞働と

交換すべき何ものも占有していない。しかしかような土地の均分は歴史的事實ではありえない。土地は各人の能力に應じた、必要な消費以上の耕作の結果として分割せられた。たとい土地の均分が存在したとしても、人間は自己の消費以上の、他の生産物と交換すべき餘剰生産物をもたないのであるから、衣食住に關する彼の雜多な需要をみたすには、ただ彼自身の勞働によつて、すなわち自給自足によつて可能であるにすぎない。しかしこのことは殆んど不可能に屬する。蓋し土地の各部分は決してあらゆるものを生産しないのであつて、そこには穀物の生産に適した土地と棉花にのみ適した土地があるからである。そこには農業者間の分業と交換が經驗によつて必然的となる。(二二)

しかし人間の欲望を充足するには農産物のみでは充分ではないのであつて、そこには加工勞働が必要なのであるが、もしある人が自給自足のためにおのれの土地にあらゆる種類の必要品を生産し、それに加工せんとするならば、その成功は困難である。かような加工勞働は多大の熟練と複雜勞働を必要とする。したがつて自給自足は時間、空間及び原材料のおびただしい損失なしには行いがたい。このような事情のために農業者と他の加工勞働者との分業とそのあいだの交換關係がうみだされてくる。『各々の勞働者は他のすべての勞働者の需要を滿さんがために勞働し、後者はまた前者のために勞働する。』(二三)

かような分業と交換關係を通じて社會階級の分裂が成立する。單純な勞働者の勞働が、農業者が提供する彼らの消費物資の價値と相ひとしい價値を生産するにとどまるのに反して、農業者の勞働が自然の生産力の結果として自己の消費以上に生産するところのもの（自然の純粋の贈物）こそ、他のすべての社會成員が彼らの勞働と交換にうけとる彼らの賃金の價値部分にほかならない。こゝにこの兩種類の勞働の本質的差別が存在している。(二四)

かくて社會はまづ最初に二大階級に分裂する。一つは生産者すなわち耕作者の階級であり、他は被傭階級(stipendary class)すなわち手工業者の階級である。(二五)

しかし土地私有の發展と土地の不平等な分配の結果として、耕作者階級はさらに耕作者自身と、農業勞働の純生産物（net Products）すなわち收益を自由に處分しうる階級（disposable class）に分裂する。(二六)

被傭階級もまたさらに、多數の勞働者に賃金を前貸し、原材料を提供する資本の所有者、すなわち事業家、マヌファクチュア經營者、雇傭主の階層（order）とその勞働力以外になんらの財產をもたない單純な手工業者の階層に分裂する。(二七)

かようにチュルゴオにおいては、生產的勞働、したがつて剩餘價値の概念が明確にせられていないけれども、彼が社會階級の本質を、分業と交換及び生產手段の所有にもとづく餘剩勞働の占有と關連して考察しようと試みていたことが明かである。

フランスの重農學派の影響のもとに、ファグソンの分業論を發展させ、古典派經濟理論を完成したものがアダム・スミスであつたが、ファグソンが富の生產の技術的發展の要求から分業を說明するのに對して、スミスはかような分業の原因を交換經濟の必然性に求めている。『分業は、ある人が他の人と物々交換をしようとする、人間性のうちにある直接的傾向から、源を發するのであつて、かような傾向は人間には共通ではあるが、他のいかなる動物も知らない』とスミスは述べて、分業を人間の自利（selflove）から說明している。すなわち『私の欲しいものを私に與えるなら、あなたの欲しいものが手にはいるだろう』という原理―說服（Persuade）―こそ分業の根底である。(二八)

すなわち自己の勞働の剩餘を他人のそれと交換しようとする性質こそが、各人の自給自足を不必要とし、またその勞働の剩餘の增大がいよいよ分業を有効にすることを、スミスは、弓矢の生產に熟練した者が弓矢と交換に狩獵者からその獲物を得る例を以て說明している。すなわち交換を有利だと考える人間性こそ分業の原因にほかならない。また分業が可能であるためにはその前提として、生活乃至生產資材（stock）の蓄積がすでに成立していなければならな

い。スミスにおいては分業が前提となつて生産物の餘剰と物々交換が可能となつたのではなく、逆に交換經濟の必然性と生産物の餘剰が分業を發展せしめたのであつて、かような觀念は、十八世紀の資本主義的生産におけるブルジョア的ホモ・エコノミクスの理論的表象にほかならない。(二九)

ファグソンにおいては自然的資質が不平等の原因となつたけれども、スミスにおいては、天分と才能は交換經濟の自利的衝動にもとづく分業の結果にほかならない。人々が相互に交換・分業關係に入ることを利益とするが故に、哲學者と運送人、精神勞働と肉体勞働の分裂が生じたのである。(三〇)

かような分業がいかにして社會的不平等關係をうみだすかというのに、一つには分業そのものの不平等であり、他は分業によつて著しく增加した餘剰の勞働生産物の分配の不平等に關連している。精神勞働と肉体勞働の分裂は、まづかような不平等の基礎をなしている。スミスはつぎのように不平等な分業を説明している。

「文明社會においては分業が存在しているが、平等な分業は存在しない。蓋し全く勞働しない多數の人々が存在しているからである。富の分配は勞働に應じておこなわれてはいない。商人の富は、より少ししか勞働しないけれども、彼の事務員全部の富よりも大である。しかも後者は、彼らよりも一層重勞働する同數の手工業者の六倍以上の富をもつている。屋内で氣樂に仕事をする手工業者は、休みなしに骨おつて上下する勞働者よりもはるかに豊かな富をもつている。かようにいわば社會の重荷をになつている者が利益をうけること最も少い。(三一)」

かような不平等な分業による勞働生産物がいかに分配せられるかについて、スミスは商品の價格の分析によつて具体的に説明している。勞働の全生産物が勞働者に屬する場合には、その商品の自然價格は、その生産に要する勞働の量、すなわち勞働の自然價格によつて決定される。しかしスミスにおいてはすでに述べたように、分業の成立以前に勞働の餘剰と、從つてまたその蓄積たる資本が存在せねばならないのであるから、生産物を賣ることによつて、ある

いは勞働者の勞働が原材料の價値につけ加えるところのものによつて、利潤をつくりだすために、資本の一部は勞働者を雇傭し、彼らに原材料と生活資材を供給するために投資せられる。この場合勞働者が原材料の價値につけ加える新しい價値部分は二つの部分に分割される。その第一の部分は勞働者の賃金を構成し、第二の部分は資本家が前貸した原材料と賃金の總体資本の利潤を構成している。かような利潤は資本家の生産に對する監督と指導の特別の勞働に對する賃金にほかならないけれども、利潤を支配する法則は、賃金のそれとことなつて、前貸される資本の價値の大小に比例していると述べている。(三二)

すべての土地が私有財産に轉化してしまうときには、土地所有者は他の人々とひとしく、彼らが播かぬところに刈りとることを欲する。以前はただ採集する勞働があれば充分であつた土地の生産物は、いまや追加的價格を要求する。勞働者は彼の勞働が採集し、あるいは生産するところのものの一部分を地主に支拂わねばならぬ。この部分が、あるいはこの部分の價格が、土地の地代(rent)を構成するのであつて、大多數の商品價格の第三の構成部分を形成している。(三三)

各國の年勞働生産物の價値總額もまた、商品價格と同じように三つの構成部分にわかつことができる。すなわちそれは勞働者の勞賃として、資本の利潤として、あるいは土地の地代として國民に分配されねばならない。かような地代・勞賃及び利潤の三要素は、人民の三つの相異つた階級(orders)の所得を構成している。すなわち地代によつて生活する地主階級、勞賃によつて生活する勞働者階級、利潤によつて生活する資本家階級である。これらの諸階級は、各文明社會の固有の基本的三大階級であつて、他の諸階層は結局これらの階級の所得からその收入を得ているにすぎないと述べている。

こゝに近代的三大階級の理論が完成せられてきた。そしてスミスにとつては、かような諸階級間の不平等こそ、政

治・法律の存在理由にほかならない。(三四)

英國の正統派經濟學の最終の偉大な代表者リカルドは、フィジオクラット、アダム・スミスの理論を發展させ、階級的利害の對立、すなわち勞賃と利潤、利潤と地代の對立を素朴に自然律とみなし、これを意識的にその研究の出發點とした。その著『經濟學と課稅の原理』(Principles of political Economy & Taxations) 序論においてつぎのように述べている。

『土地の生產物、すなわち勞働・機械及び資本の結合した利用によつてその表面から得られるところのものはすべて、社會 (community) の三階級、すなわち地主、その耕作に必要な資本 (stock or capital) の所有者及びその勤勞によつて土地を耕す勞働者のあいだに分配せられる。

しかし社會の異つた段階においては、地代・利潤及び賃金の名のもとに、これらの各階級に分配される土地の全生產物の割合は、本質的に異るであろう。(三五)』

しかしマルクスが指摘するように、それとともに正統派經濟學はうちこえがたい限界に到達した。資本主義的生產方法が上昇期にあつて、その內在的矛盾がいまだ增大せず、新しい階級としてのプロレタリアートの階級鬪爭がいまだ發展していないあいだだけ、かような社會階級論とブルジョア階級國家論の体系は可能だつたにすぎない。(三六) 生產手段の資本主義的占有と勞働生產力の社會的性格の矛盾の著しい增大、すなわち無秩序的過剩生產にもとづく漫性的恐慌狀態と失業人口の激增は、プロレタリアートの階級鬪爭をいよいよ激化せしめ、剩餘價値の本質と、資本家・地主の寄生的性格を一層明白にしてきた。かくて英國の經驗學派乃至フランスのフィジオクラットの實證的社會階級理論の系列は、觀念的抽象的形而上學に轉落し、その歷史的使命をおわつた。

(一) Loke, Two Treatises on Government. §. 26. P. 204.

(二) Ibid., §. 27, p. 204.

(三) Ibid., §. 32, pp. 206—207.

(四) マルクス『剰余價値學説史』第一巻（マルクス・エンゲルス全集，第八巻，二二頁以下）

(五) Locke, id., §. 40, p. 211.

(六) Ibid., §. 43, pp. 212—213.

(七) Ibid., §. 45—47, pp. 213—214.

(八) Ibid., §. 48, p. 215.

(九) Ibid., §. 50, p. 215.

(一〇) D. Hume, Treaties of Human Nature, vol. Ⅱ. pp. 191—192.

(一一) A. Ferguson, Abhandlung über die Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft, SS. 253—254.

(一二) A. a. O. SS. 254—255.

(一三) A. a. O. S. 257.

(一四) A. a. O. SS. 258—260.

(一五) A. a. O. SS. 260—261; SS. 261—262.

(一六) A. a. O. SS. 263—264.

(一七) Du Pont, Physiocratie; pp. 24—25; Quesnay, Allgemeine Grundsätze, SS. 14—15.

(一八) Id., p. 35; Quesnay, a. a. O. S. 21.

(一九) Id., p. 45; Quesnay, a. a. O. S. 23.

(二〇) Id., pp. 45—46; Quesnay, a. a. O. SS. 23—24; Engels, Anti-Dühring, S. 263.

(二一) マルクス『剰余價値學說』第一卷、(マルクス・エンゲルス全集、第八卷、七二頁以下)。
(二二) Turgot, Reflections on the Formation & the Distribution of Riches, (ed. by W. J. Ashley), pp. 3—4.
(二三) Ibid., pp. 5—6.
(二四) Ibid., pp. 7—9.
(二五) Ibid., p. 10
(二六) Ibid., pp. 12—15.
(二七) Ibid., pp. 53—54.
(二八) A. Smith, Jurisprudence, Lectures, pt. II. § 5, p. 169, p. 171.
(二九) Ibid., pp. 169—170, p. 222.
(三〇) Ibid., p. 170.
(三一) Ibid., pp. 162—163.
(三二) A. Smith, Wealth of Nations, (ed. by Lerner), pp. 47—48.
(三三) Ibid., p. 49.
(三四) Ibid., p. 52; p. 248.
(三五) Ricardo's Works, p. 5. マルクス『資本論』、第二版序文。
(三六) マルクス、仝右。

六

古典派經濟學の實證的理論が達成していた、分業、交換經濟、それを基礎とした他人の餘剰勞働の占有及びそこか

ら生ずる財産所有の不平等に關する理論上の業績を繼承し、これらの理論がそのブルジョア的限界のために徹底しえなかつた缺陷を、その内在的批判によつて克服し、かくてブルジョア社會における階級對立のみならず、社會階級一般に關する社會階級理論を發展せしめ、階級的矛盾そのものの止揚に關する科學理論を完成する任務は、かような階級的抑壓に惱むプロレタリアートの立場に歸する。マルクス・エンゲルスの階級理論はかような課題に答えるために現れてきた。

すでに『ヘーゲル法哲學批判序論』(Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung, 1843) においてマルクスは、ドイツ解放の實證的可能性を問い、自らつぎのように答えている。

『相つぐ革命によつて、市民社會の階級でありながら市民社會の階級ではない一階級を、すべての等族の解消である一等族を形成すること、その普遍的惱みをとおして普遍的性格をにない、特別な無權利ではなく無權利それ自体に惱むが故に、特別の權利を要求しない階層 (Sphäre)、もはや歴史上の資格にではなく、人間の資格に訴えることのできる階層、……最後に、他のあらゆる社會層から自らを解放するとともに、同時に他のすべての社會層をも解放することなしには、自らを解放しえない階級、すなわち一言を以つていえば、完全な人間喪失であつて、人間の完全な回復によつてのみ自己にたちかえることができる階級を形成することによつて、かような社會の解消を特別の等族としてなすものはプロレタリアートである。』(二)

新しい社會階級解放の理論は、『ドイツ・イデオロギー』においても發展させられ、舊來の革命がただ社會活動の分配の變更や、勞働を別の人間にわりあてることをのみ目的としたのに對して、共産主義革命は、活動の從來の樣式に反抗し、勞働をとりのぞき、あらゆる階級支配を階級そのものとともに廢止する。蓋しもはや社會においていかなる階級ともみなされず、從つて階級とはみとめられない、現在の社會の内部ですべての階級、國籍の解消の表現とな

つている、一階級が、この革命を遂行するからであると述べている。(二)

かようなプロレタリアートによる階級解放の思想が、『共産黨宣言』のうちに實踐綱領として宣明せられたことは言うまでもない。

等族と區別した近代階級の概念について、マルクスはすでに『ヘーゲル國法論批判』において、ヘーゲルの民事社會における階級と政治的階級との逆立ちした關係を批判しつゝ、つぎのように述べている。

『……政治的階級が社會的階級に變化して、……個々の人民成員がその政治的世界の天上において平等であり、社會の地上的存在において不平等であるのは、歴史の一進歩である。……フランス革命がはじめて政治的階級の社會的それへの變化を完成した。換言せば、市民社會の階級的區別を單に社會的區別に、政治生活において無意義な私的生活の區別に變化させた。』

そしてマルクスはかような階級的區別を職分との結合において考えている。『階級は……人間を彼の普遍的な本質から區別する。それは彼を直接的に彼の職分と合致する動物たらしめる』と彼は述べている。(三)

かような職分、すなわち分業がマルクスにおいていかように考察されていたかというのに、彼は分業を説明して、『この分業なるものは、最初は性行爲における分業にほかならず、次には自然的素質、欲望、諸偶然等々によつておのずから、すなわち「自然生的に」うまれた分業にほかならなかつた。分業は、物質的勞働と精神的勞働との分化が出現する瞬間から、はじめて現實的に分業となる』と述べている。かような分裂が、『享樂と勞働、生産と消費とがべつべつの個人に歸屬するという可能性、いな現實性』を與えたのであつて、かような分化のうちその最大のものは都市と農村との分離であつた。(四)

かような分業のなかにふくまれた矛盾關係は分配關係のうえに反映せられる。『こういう分業の出現とともに、

分配もまた……、しかも勞働と勞働生産物との不平等な量的ならびに質的な分配つまり財産があたえられる。…要するに分業と私的所有とは同一のことを表現することばである」と彼は述べる。(五) かような分業の發展段階に對應して、各種の所有の諸形態が現れてくる。すなわち分業の段階が勞働の材料と勞働要具と生産物との關係における個人相互間の諸關係をも規定するのである。マルクスはかような所有形態として、(一) 種族的所有、(二) 古代の共同体所有と國家所有、(三) 封建的・身分的所有を擧げている。第一の段階では分業はまだごくわずかしか發展していないが、家族内における自然的分業はすでに奴隷制の萠芽をふくんでいる。第二の段階において分業は相當に發達し、農村と都市の對立、都市の内部における工業と海上商業の對立が存在している。こゝにおいて市民と奴隷との階級關係は完全に發達している。第三の段階においては土地に對する封建的領有と、都市における商工業的組合協同体(コルポラシヨン)所有が存在し、これに對應して農村と都市の對立、農村における諸侯・貴族・僧侶・農民の差別、都市における親方・職人・徒弟及び日傭賤民の身分的差別があらわれた。エンゲルスもまた、『分配における差別とともに、階級差別があらわれてくる。社會は、利益を得る階級と損をする階級、搾取する階級と搾取される階級、支配と被支配の階級にわかれる』と述べている。(六)

かような分配上の不平等の源泉は、古典派經濟學が、きわめて不徹底にではあるが、その理論のなかで展開した餘剰勞働の占有のうちにもとめられねばならない。マルクスの『資本論』は、餘剰勞働に關する古典派理論の正しい發展であり、その科學的分析にほかならなかつたが、彼は餘剰勞働について、『社會の一部分が生産手段を獨占するところではどこでも、勞働者は自由人たると非自由人たるとを問わず、生産手段の所有者の生活資料を生産するために、自分の自己保存に必要な勞働時間のうえに餘分の勞働時間を附加せねばならぬ』と述べ、エンゲルスはこの點をつぎのように補足して説明している。『餘剰勞働、すなわち勞働者の自己保存に必要な時間を超過する勞働と、この

餘剰勞働の生産物の他人による占有、すなわち勞働の搾取とは、かくて階級對立の中に運動してきた限りにおけるすべてのこれまでの社會形態に共通している。』マルクスによつて發見された剰餘價値こそ、資本主義社會における階級の本質を解明する鍵を與えている。(七)

かように一定の分業とそれにともなう社會的職能の分化が、生産財と他人の餘剰勞働の占有を可能ならしめ、かくて分配上の不平等關係を生み、こゝに社會階級を成立せしめたことが理解せられる。すでにマルクスは『ドイツ・イデオロギー』のなかで社會階級についてつぎのように綜括的に說明している。

『一國民の内部での分業は、はじめに産業及び商業の勞働を農耕の勞働から分離させ、これとともに都市と農村との分離、そして兩者の利害の對立を發生させる。分業がよりいつそう發展すれば、商業勞働が産業勞働から分離する。それと同時に、これらの各種部門の内部での分業によつて、さらに一定の勞働に協働する個々人のあいだに各種の部類が發達してくる。このそれぞれの部類の相互の地位は、農耕勞働・産業勞働・商業勞働の經營樣式（家父長制・奴隷・諸身分・諸階級）によつて制約されている。』(八)

こゝでは社會階級が經營樣式として把握されているが、これは餘剰勞働の占有の形式に關連して述べられているものであろう。

分業と社會階級との關連をより正確に、綜合的に究明しつゝ、エンゲルスは『反デューリング論』において、共同体内部における共同的利害に關連した社會的職能の分化と、農耕勞働内部における自然發生的分業の發展による餘剰勞働の可能性、すなわち奴隷制の起源をもつて社會階級を說明している。また他の箇所では『この專ら勞働にしばられた大多數の人々とならんで、社會の共同の行事に從う、直接の生産的勞働から解放された階級が、すなわち政治・司法・藝術等の分業が形成される。分業の法則こそ、階級分化の基礎に存在するところのものである』と述べている。(九)

かよな社會階級を構成する諸要素、分業・餘剰勞働・生産手段の占有・分配上の不平等のいづれがその本質的契機であるかに關しては、周知のとおりマルクス自身が『資本論』の最後の章において階級に關して説明する途中絶筆となつたために、マルクス主義の論陣の内外において各種の解釋の相違を生みだしてきた。(一〇)

マルクスはこゝで、一つの階級を形成するものは何か、すなわち賃金勞働者、資本家及び地主をして三大社會階級を形成するにいたらしめたものは何かと自ら問い、次のように述べている。

『一見したところ所得と所得源泉の同一性である。これらの三大社會集團の構成分子たる個々人は、勞賃・利潤及び地代によつて、すなわち自己の勞働力、自己の資本及び自己の土地財産によつて生活している。

しかしこういう見方からすれば、例えば醫師と官吏もまた相異つた二階級を構成するであろう。蓋し彼らは、この兩者の夫々に所屬している人々が所得源泉を同じうしている、二つの相異つた社會集團に屬しているからである。同じことが、社會勞働の分割、すなわち勞働者と資本家及び地主、後者においてはさらに葡萄園・農耕地・森林・鑛山・漁場の所有者の分裂をふくむ、利害と地位の限りない分裂について言いうるであろう。』(一一)

つぎに社會階級論として顯著な問題を提供した若干の文献を檢討してみよう。

まづシュモラァは分業を職業との關連において考え、職業の分化と固定化から社會階級を論じている。一定の職能的分化にともなう特殊の勞働方法、生活樣式は、遺傳・環境への順應・自然淘汰の結果として個人の性格・慣習・訓練をつくりあげ、これらの條件が一致して典型的階級性をうみだしてくる。まづ專門の分野で働く個々の個人の改造がおこり、次にかような傾向を固定化されたこれらの人間の一團の幾世代を經た變容が階級を構成せしめる。勿論すべての分業が階級を形成するのではなく、技術・精神・道德及び制度上の改善をもたらすべき廣汎な發展的分業の層が、階級構成に影響する。(一二)

職能的分化の遺傳や環境順應に關する理論は問わぬとしても、職業と分業及び社會階級の關連については考察する必要があろう。職業が社會的分業の結果として發生し、それが各人を特定の分業に固定化していることは明かであつて、分業それ自体がいまだ未發達なツンフトやマヌファクチュアの段階においては、分業と固定的・世襲的職業とは一致する。しかし勞働生産性の著しい昂揚をもたらした大工場制生産のなかにあつては、分業の技術的分化は職業による區分よりも一層複雜化しており、また流動的である。したがつて職業と分業の概念はきわめて密接な關係にあるけれどもいまだ決して同一の内容をもつものではない。しかし職業の特質を、特定の生産種類への緊縛、專門技術、能力の固定を特質とする社會成員の分化と規定して、分業一般とその社會的歷史的形式としての職業とを區別する見解については疑問なきを得ない。固定的專門的分業としての職業の消滅の過程は、分業それ自体の揚棄の過程ではないのであろうか。(一三) しかもいかなる職業上の差別が階級の形式と結合するかについては、シュモラアの説明はきわめて明確をかぐのであつて、この見解によれば職業の數だけ階級分裂が存在することを結論することを妨げない。

デューリンは、職業は分業上の差別を特定の生産用具と生産對象、すなわち物に對する關係によつて區別するのであり、同じく分業によつて成立した人間相互の社會的不平等關係を規定するものではないと論じ、シュモラアの階級理論を反駁しつゝ、自らは社會階級の本質を、生産過程における役割の類同性にもとめている。(一四) 社會階級とは、『生産過程において他の者に對し同一の關係をもち、かつこの場合、この關係が物質(勞働手段)のなかにも表現せられているような、生産における同一の役割を演ずる』人々の全体である。社會階級は分配關係における不平等であるけれども、生産物の分配は生産關係によつて規定せられる。したがつて生産關係における人間の地位の不平等が階級の根據なのであつて、人が生産過程において占める指導的(Kommandierend)地位と現實の生産勞働に從事する立場との差別——それは物質上の關係にも表現せられている——によつて社會階級は形成される。(一五) ハインリヒ・クノウもま

た生産關係を重視し、社會的總生産のなかにおける同一の相互關係、すなわち經濟活動の同一の範疇に階級の本質をもとめているが、この定義は經濟活動の範疇という概念が明かにせられないかぎり、一層不明瞭なものになつている。(一六)

しかし資本主義的生産關係について考えてみるならば、生産行程における指導と被指導の關係からブルジョアジイとプロレタリアートの分裂が生じたのではなしに、むしろ逆に生産手段に對する資本主義的占有の結果として生産過程における指導と現實的生産勞働との分裂が成立したことは、カウツキーの指摘するとおりである。しかも資本家・地主は、生産行程に參加しない場合が多數存在しうる。(一七) またソヴイエト同盟の社會主義社會について考察してみるのに、生産行程の指導者、工學者・技術者・熟練勞働者は、指導せられる未熟練勞働者に對して別個の階級を形成するとは考えられていない。したがつて生産關係における指導と被指導の觀念をもつては、いまだ社會階級の概念を明確にしえないと言わねばならない。分業自体の概念と關連した職業、生産上の地位の差別によつて、社會階級を説明せんとする試みはいづれも失敗におわつている。

これらの企圖に對して、分業によつて生ずる分配上の不平等に關連して社會階級を説明しようと試みたのはカアル・カウツキーであつた。彼はマルクスの絶筆となつた階級理論を發展せしめる企圖をもつて『階級利益——特殊利益と共同利益』(ノイエ・ツアイト、第二一卷第二號)において、國民總所得の分配に關する利害の共同と對立をもつて階級を説明しようとしている。『それ(——個々の階級を形成するもの)は、ただ單に所得源泉の共同性にとどまらず、そこから生ずる利益の共通性と他の諸階級に對する對立の共通性にほかならない。したがつてこれらの諸階級は、自己の所得源泉の收入をよりゆたかならしめるために、それぞれ他の階級の所得源泉を狹くしようと努力している』と述べている。(一八) しかしこの見解では、マルクスによつて否定された所得源泉の共同性の理論からいくばく距つているか疑問なきを得ない。また階級をもつて階級を説明する循環論法におちいつている。そこでカウツキー自身かよ

うな分配上の不平等から階級を説明する見解を改めるにいたつた。

新しいカウツキーの見解によれば、社會階級の分化は、一方では生産手段を占有（verfügen）しうる人々と、他方ではそれを占有していない人々とへの、社會構成員の分裂とともにはじまるのである。階級の問題は生産手段の占有、したがつてまたそれによつて生産される生産物の占有の問題である。さらにそれと關連して搾取と被搾取の要因が加わつてくる。したがつて搾取とそれから生ずる階級對立の基礎は、一方における生産手段の所有と處分權の事實と、他方それを利用することなしには存在しえない人々における生産手段及びその處分權の缺除の事實にほかならない。かように生産手段の占有にもとづく對立關係をもつて社會階級の本質を説明する立場は、ストウチカのそれでもあり、最近では鈴木安藏氏もかような見解を支持せられる。(一九)

しかしカウツキーが階級の本質として生産手段に對する占有と搾取を擧げながら、機械的唯物論の立場におちいつたことは既に述べたが、彼の階級理論は、征服を認めるが故に誤つているというのではなく、その階級の定義そのものに非科學的契機を含んでいるが故にこそ、彼の見解は史的唯物論と全く緣のない暴力論に轉化してしまつたと言わねばならない。彼の見解は、正統派經濟學のなかに發展し、マルクス・エンゲルスによつて一層科學的に分析された分業理論に對する無知を曝露している。單なる職能上の分化や分配の不平等、生産手段の占有とそれにもとづく搾取の事實は、いづれも階級の要素を構成しているけれども、自給自足的生産統一組織の内在的矛盾の發展としての分業を辯證法的に把握することこそマルクス階級理論の特徴であろう。こゝに私どもは再びマルクス・エンゲルスの分業論と、かような分業の成立と解消の必然性に關する理論にかえつて、社會階級の科學的概念を求めねばならない。

英國經驗學派の分業論は、すでに述べたように、十八世紀の哲學思想に共通なロビンソン・クルウソオ物語から出發する。抽象的孤立的人間の欲望と、それを充足すべき財の不足、あるいはアダム・スミスにおけるように交換經濟

を有利とする人間の性質に内在する傾向から、分業の必然性を證明しようとする。かように分業を永久の人間性から導きだす理論は、プルードンにおいて分業を永久的一法則、單純で抽象的な一範疇とみなす見解に歸着する。プルードンによれば、分業は勞働に固有の、そして勞働の多産力の第一條件であるところの法則の歸結にほかならない。それは諸條件と知能の平等が實現せられるための樣式である。マルクスは分業に關するかような抽象的、觀念的理論を『哲學の貧困』のなかで反駁している。『歴史のさまざまな時代における分業を說明するには、抽象だけで、觀念だけで、ことばだけで彼には充分でなければならない。カストもコルポラシヨンもマニユファクチユア制度も大産業も、たつた一つのわける(diviser)という言葉によつて說明されねばならない』と述べて、その空疎な抽象論を嘲笑している。(二〇)かような人性論的見解によれば、分業は社會階級の成立以前から存在したのであり、たとい社會階級の消滅後においても尙かつ存在すべきはづのものである。『分業は、いかなる社會構成においても、社會的生産……にとつて內在的な、必須な技術的範疇である。』(二一)

しかし私どもは、すでにフイジオクラットの社會發展論が、分業の發展に伴う社會の階級分化を指摘していたことに注意せねばならない。そこでは狩獵、漁撈、牧畜及び農耕段階における分業の發展をもつて社會の分化が說明せられる。

すなわち彼らの理論によれば、社會的存在の第一段階は群團狀態(état de multitude)であつて、その要求と關係はきわめて素朴であり、平和的な生活をおくり、土地の自然的生産物によつて滿足させられる自已保存の努力にすべての人々が導かれている。それはstudium de la recherche des productions vegetables spontanées(草食段階)であつて、不平等關係はほとんど見だされない。ただこの時代に族父權が成立し、血緣關係、家族が社會的集團關係の起源をなしている。(二二)

土地の自然的生産物が需要の充足にとつて不充分であることがわかつたとき、そこに新しい方途が求められねばならなかつた。こゝに社會的存在の發展の第二段階が見だされる。植物性の生活資料の收集ではなしに、他の生物を殺すことによつて、狩獵と漁撈によつて人は生活を維持するようになる。かような狩獵及び漁撈の時代においてもいまだ社會階級は發生していないけれども、狩獵等の共同の作業は上位者の指導を要求し、こゝに權力が成立するにいたつた。(三二)

第三の時代には牧畜が成立する。前の時代に發生した權力の所有の分離とならんでさらにより廣汎な社會分化が進むのが、この時代の社會的特徴である。すなわち經濟的財――必然的に動産――の所有者は、これらの人々のもとにその生命を維持している無產者と分裂するにいたる。すなわち "Propriétaires" 階級と "salariés" 階級の發生である。(三三)

欲望充足の自然的手段が人類の進歩にともなつて不足するにつれ、技術によつて自然を克服する可能性が現れ、こゝに農耕が始まつた。これが農耕定住時代であつて、發展の最後の且つ最高の段階である。こゝにおいて本來の社會 état de société が始まる。自己保存と、物質的財の增加と蓄積の手段は、併存せる、ゆるい結合關係の個人によつてはもはや達成されない。任務が分割され、この分業が社會機構を制約している。こゝにケネェの三階級論が現れ、ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエールの普遍社會 (société universelle) の特殊社會 (société particulières) への轉化があり、既述のとおりチュルゴォにおいては社會的分化に對する分業の意義が强調される。(三四)

かような社會發展論は當時においてはきわめてすぐれた見解であつたが、しかしかような理論をもつてしても分業の必然的契機については、需要の充足の不充分であり、自然秩序的自己保存以上のいかなる說明をも與えない。こゝに私どもは再びマルクス・エンゲルスの分業、したがつてまた階級起源論にかえつて、分業の必然的契機をたづねよ

う。

マルクスにおいても分業、したがつて物質的勞働と精神的勞働の分化は、社會階級發生の本質的契機であり、かような分化の歴史的發展を彼はすでに『ドイツ・イデオロギー』のなかで説明しているが、それは今なおすぐれた科學理論たることを喪わない。

『物質的勞働と精神的勞働との分化のうちで最大のものは、都市と農村との分離である。都市と農村とのあいだの對立は、未開から文明への、種族制度から國家への、地方割據から民族への推移とともにはじまり（傍點—竹原）、そしてそれ以來こんにちにいたるまでの文明の全歴史をつらぬいている。都市の出現とともに、同時に行政・警察・諸租稅等の、要するに自治体制度の、ならびにこれとともに政治一般の、必然性があたえられた。まず第一にこゝにあらわれたのは、直接に分業ともろもろの生産要具にもとづく二大階級への人口の分化であつた。』(二四)

かような分業がいかにして必然的となつたかに關しては、人性論的見解では説明されないし、また單純な人口增加から説明することは、人口自身が生産力の發展に制約されていることから考えても、正しい科學的見解ではありえない。(二五) そこには別の規定が必要である。さきにエンゲルスの分業と社會階級との關連の綜合的見解を説明したときには、私はそこで述べられていたかような分裂の契機を、理論構成の必要上かえりみなかつたのであるが、いまや私どもは『反デューリング論』にかえつて、かような分裂の契機を問わねばならない。エンゲルスは、分業の發生をもつて社會階級の成立を説明しつゝ、かような分業の必然性を人間勞働の生産性の相對的未發達から説明している。

『人間勞働がまだ必要な生活手段以上にわづかしか余剰を供給しえないほどに、あまり生産的ではないかぎり（傍點—竹原）、生産力の向上、交通の擴張、國家と法の發展、藝術と科學の建設はまだ進んだ分業によつてのみ可能であり、かような分業は、單純な手の勞働に從事する大衆と、勞働の指導、商業、國務及び後には藝術及び科學に從

事する少數の特權者とのあいだの重大な分業を基礎とせねばならなかつた……。[二六]』

『…搾取と被搾取、支配と被支配の階級の、從來のすべての歴史的對立は、まさにこの人間勞働の相對的未發達な生産性（傍点—竹原）によつて説明せられる。現實に勞働する人口が、社會の共同の仕事—勞働の指導、國務、裁判所、藝術、科學等に從事するために必要な時間がほとんどないほどに、彼らの必要勞働のためにきわめて多くを要求せられるかぎり、現實の勞働を免除せられて、これらの職務をつかさどる特別の階級がつねに存在せねばならなかつた。[二七]』

エンゲルスは同じ著書の他の箇所でも、『搾取と被搾取、支配と被支配の階級への社會の分裂は、これまでの低い生産發展の必然的結果であつた』とかさねて説明し、また『たとえ階級への分化が一定の歴史的理由をもつとしても、それはただ一定の與えられた時間、與えられた社會的條件に對してのみかような存在理由をもつにすぎない。それは生産の不充分（Unzulänglichkeit）にその根據をもつている』と述べている。かような生産の不足による分業の成立は、すでにヒュームやフイジオクラット就中チュルゴオに萠芽的に見だされたが、エンゲルスはかような理論を發展せしめたものにほかならない。[二八]

かような生産力の相對的未發達が何に對する相對性かというのに、それは單純な生産力の低さと同じではありえないのであつて、人間の社會生活の特定の歴史的段階において發生した現象にほかならない。個人乃至家族の自給自足的經濟が、なんらかの社會的要因によつてうしなわれ、かような自給自足的經濟（原始社會の低い生産力におけるそれではなしに、數次も高度化された生産力における、「各人はその能力に應じて働き、需要するところに從つてとる」原則が妥當する）を回復するまでの社會歴史的段階における、生産力の相對的未發展である。

かように理解するならば、原始社會における自給自足狀態を喪わしめ、分業と社會階級の分化をもたらした、すな

わち生産力の相對的未發達をもたらした社會的要因が何であるかについてエンゲルスはいまだ明確な答えを與えてはいない。

リュウイス・モルガンの『古代社會』(Ancient Society, 1877)の影響のもとに書かれたエンゲルスの『家族私有財産及び國家の起源』のなかでは、母系氏族の財産共有制度と對偶家族(syndiasmian family)のもとにおける生産力の自然生的增大―エンゲルスが『反デューリング論』において階級發生の第二の原因としてあげている自然發生的分業と對應する―との矛盾から、母系制社會の崩壞と、族父制社會への發展を說明している。そこでは生産力の相對的未發達の契機から分業を說明する試みはなされていない。(二九)

かような分業を必然たらしめた社會的要因について、今中次麿教授によつて提出された解決の企圖は、きわめて注目すべき理論上の課題を提示しているといわねばならない。教授は生産力の相對的未發達を、母系制度の崩壞と族父の勞働負擔の責任の發生にもとめる。

『かくして血族婚姻禁忌の因果法則は、遂にポリガミーにまで至ることを要求している。この族父制大家族制度の成立によつて、はじめて大家族制下における一人の族父の支配と責任が發生し、自足生活が崩れて、分業と交易による余剩生産と余剩勞働の必要が發生してきた。これが社會階級の生長を促し、階級社會の內面的矛盾による、種族の種族に對する戰鬪及び征服を喚起し、一種族の他種族に對する支配形態としての民族統一社會を生成せしめた。』(三〇)

母系氏族制社會を規制していた血緣關係を規律する社會法則にかわつて、族父制社會においては生産力と生産關係を規律する社會法則が支配しはじめ、こゝにおいて舊來の自給自足經濟がうしなわれて、大家族を扶養すべき族父の經濟上の負擔の成立が、族父社會をして生産力の相對的未發達に當面せしめ、分業と他人の余剩勞働の占有、すなわ

ち社會階級の分裂が發生するにいたつた。

したがつて社會階級の解消のためには、生産力の相對的未發達が克服され、分業それ自体が消滅することが必要である。すなわち生産力と社會狀態、意識がたがいに『矛盾におちいらなくなるような可能性は、分業をふたたび廢止することのうちにしか存在しない』のである。そしてこれは空想的共産主義者の企圖していたところのものでもあつたけれども、エンゲルスも言うように生産力の相對的未發達の解消は、決して單なる空想ではなくして、大工業が達成した生産力の膨大な向上によつて、すでに現實的となりつゝある。(三一) すでにマルクスは『哲學の貧困』のなかで、近代社會の内部における分業の特色が、專門と種と職業的白痴を生みだすのに反して、進歩的大機械制工場における分業は、かような勞働の專門化の性格を解消しつゝあることを指摘している。『自動工場における分業を特色づけるものはそこでは勞働が專門という特性をいつさい喪失してしまつたということである。(三二)』ただかような大工業生産における資本主義的占有形態が、技術的には止揚せられた舊い分業を、一層悲慘な狀態において再生産しつゝあるにすぎない。しかしかような資本主義的生産方法のもとにおいても、その經濟法則はつねに、大機械工業の技術的革命と、恐慌におけるその破滅との連續をもつて、絶えず社會的分業を自然法則の盲目的破壞作用のもとに曝し、かくて産業豫備軍をして、部分的機能の人間でなく、あらゆる社會的機能を全面的に遂行する能力をもつた、全面的に發達した人間たらしめることを、資本主義的大機械工業の必然的要望たらしめる。(三三)

生産力の障碍に轉化した生産手段の資本主義的占有を排除し、全生産手段の社會的占有が成立した社會主義的大工業の飛躍的發展のもとにおいては、舊い生産樣式としての分業はいよいよ排除され、かくて社會階級自体の消滅の前提條件は完成される。それまでは、ソヴィエト同盟においても、たとえ生産手段の占有による他人の余剰勞働の占有が排除されたのちにおいても、社會階級—勞働者とコルホーズ農民の、新しい友好的階級關係が存在するであろう。

それは、分業、精神的勞働と肉体的勞働の矛盾、都市と農村との分化が終極的には止揚せられていないことの必然的歸結にほかならない。そして社會主義的大工業の飛躍的發展により、生産力の相對的未發達が解消してはじめて、私どもは、『各人が專門の活動範圍をもたずに、任意の部門の修養ができる』共産主義社會に入り、『きようはこれをし、あすはあれをし、朝には狩し、午後には撈り、夕には牧畜をし、食後には批判するというふうに、私の氣のむくままのことをして、けつして狩獵者、漁撈者、牧人もしくは批判者になつてしまわない』ことができる。『分業の下における個々人の奴隷的依存、それとともに精神的勞働と肉体的勞働との對立が消滅した後』、『各人はその能力に應じて、各人はその必要に應じて』の原則が支配する共産主義社會の高度の段階があらわれてくる。(三四)

かくて私どもは分業論の体系の終極に到達した。それは、原始母系制社會における自給自足的經濟が、その内在的社會法則の必然的歸結としての母系氏族制の族父制社會への轉化の結果として、その存立が困難となつたために、必然的に發生し、かくて自給自足に必要な各種の分業を綜括するところの統一的生産組織が成立せざるをえない。かような血緣團体とはことなつた、分業によつて不可分的に結合された、族父社會の地域團体たる、統一的生産共同体の内部において、さらに精神的勞働と肉体的勞働の分裂が生じ、勞働を免ぜられた人々による他人の余剰勞働の占有がはじまり、かくてかような特權的地位が生産手段私有と他人の勞働の占有を確立するにともなつて、分配上の不平等と社會階級が成立するに至つた。

社會階級はかように、統一的生産共同体の内在的矛盾たる不可分的分業と、それを基礎とした社會的不平等關係を本質的契機としているが故に、こゝから社會階級の對立の本質もまた規定せられてくる。分業に固定された個人は、かような統一的生産組織を離れては存立しえない。『分業の出現と同時に、各個人もしくは各家族の利害と相互に交通しあうすべての個人の共同利害とのあいだの矛盾があたえられる。しかもこの共同利害は、「一般的なもの」とし

てたんに観念のうちに存在するようなものではなく、分業をおこなう個々人の相互の依存關係として、なによりもまず實際に存在するものである』とマルクスも述べている。(三五) レーニンも彼の社會階級に關する古典的定義において、『階級とは、歴史的に規定された社會的生産体系（system）における彼らの地位により、生産手段に對する彼らの關係（大部分は法律において是認され且つ規定された）により、勞働の社會的組織における彼らの役割により、從つて彼らが分配する社會的富の獲得の方法と分量によつて、區別せられる人間の大きな集團である。階級とは、社會的經濟の一定の体制（uklad）における彼らの地位の差別によつて、一つの集團が他の集團の勞働を占有しうるような人間集團である』と規定して、社會的生産体系、あるいは經濟体制（ウクラード）における矛盾として階級を把握していることも、統一的生産共同体における分業の意義を高く評價しているものと解釋せねばならない。かくてレーニンは、同一の箇所において階級の絶滅はただ搾取者の絶滅、彼らの所有の廢止によつて可能なのではなく、生産手段に對するあらゆる私有を解消し、都市と農村、精神的勞働と肉体的勞働の分裂を止揚することによつてのみ可能であると述べている。(三六)

すなわち社會階級は、自給自足經濟の維持に必要なあらゆる分業をふくむ、統一的生産共同体の内部における、分裂することのできない對立と支配の關係であつて、被支配階級がかような不平等な關係を排除するためには、舊來の分業のうえに立つ、生産手段の占有と搾取の、生産共同体の經濟体制を打倒して、新しい分業關係のうえに立つ、新らしい生産統一体を形成し、かくて舊來の階級的不平等關係を轉換する革命以外のいかなる手段もありえない。すなわち統一的生産共同体内部における矛盾の止揚によつて新しい統一的組織をうみ出す辯證法的過程によつてのみ、社會階級の轉換と解消はおこなわれるであろう。そして社會階級をかように統一における矛盾として把握するならば、私どもは民族と階級以外に「体制」の概念を必要としない。(三七)

かような統一的生産共同体が今中教授によれば、民族であり、民族の内在的矛盾が社會階級である。民族と階級、統一と矛盾のなかから必然的に政治社會は成立するのであり、階級は必然的にその成立の最初から政治社會における現象にほかならない。(三八)

(一) Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosphie, Einleitung, (Aus dem literarischen Nachlass Marx-Engels. Erster Band. 1923, S. 395)

(二) マルクス『ドイツ・イデオロギー』、(マルクス・エンゲルス選集、第一卷、上、八三—八四頁)

(三) マルクス・エンゲルス全集、第一卷、三四三—三四四頁、三四五頁。

(四) マルクス『ドイツ・イデオロギー』(マルクス・エンゲルス選集、第一卷、上、二八—二九頁、五六—五七頁)。『資本論』(邦譯)、第一卷、三三三頁

(五) 仝 右、 三一—三二頁。

(六) 仝 右、 一六—二一頁。 Engels, Anti-Dühring, S. 151.

(七) レーニン『マルクス主義の源泉と三つの構成部分』、マルクス『資本論』(邦譯)第一卷、二〇六頁、Engels, a. a. O. S. 221.

(八) マルクス『ドイツ・イデオロギー』(前掲、一六頁)

(九) Engels, a. a. O. SS. 186—188; S. 303.

(一〇) Marx, Kapital, Bd. Ⅲ. T. Ⅱ. SS. 421f; 今中次麿『現代獨裁政治學』一七七頁以下。

(一一) Marx, a. a. O. S. 422.

(一二) Schmoller, Grundriss der Allgem. Volkswirtschaftslehre, T. I. (1900), SS. 395—397.

(一三) 鈴木安藏『政治學原論』、一三六頁。同『階級』(社會構成の原理、一四二—一四三頁)。

(一四) Bucharin, Theorie des historischen Materialismus, (1922), SS. 330—331, 334.

(一五) A. a. O. SS. 323—324.

(一六) H. Cunow, Marxsche Geschichts-Gesellschafts-und Staatstheorie, Bd. II. S. 52—53.

(一七) K. Kautsky, Materialistische Geschichtsauffassung, B1, II. SS, 11—15.

(一八) A. a. O. SS. 9—10. マルクス『ゴータ綱領批判』(邦譯、岩波版、二九頁)

(一九) Kautsky, a. a. O. S. 15; ストウチカ『階級法と階級司法の問題』(邦譯)一三頁。鈴木『階級』、(前掲、一三六頁)。

(二〇) Marx, Misére de la philosophie, 3e éd. pp. 150—151,—(選集、第一卷、下、三九一—三九二頁)

(二一) 鈴木、前掲、『原論』一三六頁。

(二二) Güntzberg, Gesellschfts-u. Staatslehre der Physiokraten, S. 52.

(二三) A. a. O. S. 53.

(二四) マルクス・エンゲルス選集、第一卷、上、五六—五七頁。

(二五) 仝 右、一五頁。スターリン全集、邦譯、第一五卷、一四〇—一四一頁。

(二六) Engels, Anti-Dühring. S. 190.

(二七) A. a. O. SS 190—191.

(二八) A. a. O. SS. 303—304.

(二九) Engels, Ursprung der Familie, des Eigentums und Staates, Vorwort, VIII; SS. 38—40. エンゲルスは、母系制社會を崩壞せしめるにいたつた生產力の飛躍的增大を牧畜にもとめているが、かような歷史的段階はすでに族父制社會ではなかつたのだろうか。モルガンもまた財產制度の發展を、單純に發明と發見の進步にもとめている。(Morgan, Ancient Society, Preface, VI; p. 525.)

(三〇) 今中次麿、法政研究、第一卷合併號、(一九五〇年、三月)、三三頁。

(三一) マルクス『ドイツ・イデオロギー』(前掲、二九頁)、Engels, Anti-Dühring, S. 303, 317.
(三二) Marx, Misére de la Philosophie, p 175,
(三三) マルクス『資本論』(邦譯)第一卷、四七二—四七三頁。Engels, a. a. O. SS. 317—318.
(三四) マルクス『ドイツ・イデオロギー』(前掲、三二頁)。同『ゴータ綱領批判』(前掲、二九頁)。スターリン『ソ聯憲法とソ聯民主主義』(人民社版)七—九頁。
(三五) マルクス『ドイツ・イデオロギー』(前掲、三二頁)。
(三六) Lenin's works, (Russian), ed: Ⅲ Vol. 24, p. 337.
(三七) 高島善哉『體制』(社會構成の原理、四九頁以下)參照。
(三八) 今中次麿『政治學通論』、四三頁、同、前掲論文、二九頁以下。

七

社會階級理論における分業論の体系は、社會階級が、人間の一定の發展段階において必然的に發生した勞働生産力の未發達の結果うみだされた、分業にもとづく統一的生産共同体の内在的矛盾から生じた社會的不平等關係であり、對立であることを明かにした。そして階級はかような統一的存在の内在的矛盾關係であればこそ、階級對立は、對立者を暴力的に絶滅したり、あるいは決定的に分裂して別個の社會を構成したりすることによつて解消することのできない社會的存在であることは、自由平等な二人の人間のあいだにおける服從と支配の關係を、この兩者の相互依存的不可分的結合から説明するルソウの觀念が適切に指摘している。かような内在的矛盾の解消が、社會的存在の内部における矛盾の發展的運動によつて、飛躍的に新しい統一を創造する辯證法的過程によつてのみ可能であることもそこで明かにした。そして生産共同体の統一を維持するために矛盾の運動を阻止するための、あるいは新しい統一を創造するために展開してくる矛盾の革命的自己止揚のための、夫々の活動は、かくて政治的統一權力をうみだしてくるべ

く運命づけられている。民事社會の內在的分裂は、その分裂の最初から統一のための運動、政治權力による統一の創造を同時に必然たらしめるのであつて、民事社會的現象としての社會階級は、かくて同時に政治社會的分裂でなければならない。かくて私どもは社會階級論の体系を循環して、新しい段階における、すなわちその社會經濟的基礎に對する科學的分析の結果、ゆたかな內容を與えられた、特權論の系列へ立ちかえつてきた。社會階級は政治社會における現象であり、政治社會とともに解消する。私どもは政治社會的社會階級の意義を問わねばならないのであるが、そこにおいて重大な意味をもつものは特權論である。特權とは法律上の特例的權利の承認であり、特例的法律の免除を內容としているが、しかしその最大の要件は政治權力に對する關係であつて、必らずしも法律上の特別の適用に限らない。法律上の規定は、政治權力に對する特別な影響の効果にほかならない。

近代階級以前の諸社會階級は、例えば位階制、等族制のように、法律上にも特權的諸規定をもつた階級であつた。ただかような特權的法規定の解消を目的として、各人の自由平等を保障する法治國家原理のもとにおいては、經濟的不平等關係のみが近代階級の特質であるかにみえる。しかし私どもはスミスを始めとして、フィジオクラットの政治理論が、階級國家論であつたことをみてきた。ただケネエのみは階級の社會的事實を認めつゝ、かような分裂と、それにもとづく政治權力の行使が、民族の普遍的利益を破壞し、階級抗爭に發展することを憂え、政治社會における階級支配に反對している。(二) しかしそれはこれらの學派においては例外に屬する。ブルジョアジイの政治的支配と、プロレタリアートの政治權力からの排除は、政治上の自由權にもかかわらず、代表制、選擧制と多數決の原理のなかに實現せられている。民事法のうえにおいても、私有財產制度に對する保障制は、有產者に對する特權的規定ではないだろうか。かように考えるならば、近代階級といえども、政治上、法律上の特權から離れて存在するものではないのであつて、社會階級の政治社會的存在への必然的發展の法則から離れては存立しえない。

ソ同盟における階級についても同様であつて、その憲法は、社會階級自体の解消を目的とするプロレタリアートの政治權力の掌握と、舊支配階級の政治權力からの排除、すなわちプロレタリア獨裁を明確に規定している。たゞそのプロレタリアートの特權的地位は、それ自体の廢止を目的とするものであり、現實にコルホーズ農民に對する關係において、次第に解消せられつゝある點において、舊來の階級的特權と本質的に異つていると言わねばならない。そこには舊い階級支配を絶滅するために、新しい階級支配が必然的となつているにほかならない。

かくて社會階級は法則必然的に、相對立する階級間の鬪爭としてのそれ自体の運動において、支配、被支配いづれの側においても、政治勢力として結集せねばならない。このことは階級自体の解消を目的とするプロレタリアートの場合においても同様である。かくてマルクスは『哲學の貧困』において、それ自体としての (an sich) 階級と、それ自らのための (für sich) 階級を區別して說明している。

『經濟的諸條件がまづ第一に國内の大衆を勞働者に轉化させた。資本の支配 (domination) が、この大衆のために共通の地位、共通の利害をうみだした。かくてこの大衆は資本に對しては既に一個の階級であるが、しかしいまだそれ自らのための階級 (une class pour elle-même) ではない。鬪爭(リュット)において……この大衆は團結し、それ自らのための階級を構成する。大衆の防衛する利害が、階級の利害となる。しかし、階級の階級に對する鬪爭は一つの政治鬪爭 (une lutte politique) である。』(二)

かように社會階級は、政治鬪爭の過程において、すなわち政治社會において現實のものとなり、統一の創造をつねに要請されている分裂的矛盾となる。その、政治權力、法規範に對する結合と排除の關係こそ政治科學が明かにすべき問題となるであろう。

(一) Quesnay, Allgemeine Grundsätze, S. 54.

(二) Marx, Misère de la philosophie, P. 215; (マルクス・エンゲルス選集、第一卷、下、四四九頁)